



# 覗く眼

第5回

## 第5回-1

---

翌日から源治と沢井は、村での聞き込みを始めた。

第一発見者という男はショックのためにまだ寝込んでいて、話ができる状態ではないとの事だ。そのため目についた家、出会う村人に片っ端から聞いていっている。

「おやっさん、何だか埒があきませんね」

「まあ、こんなもんだろ。田舎ってのは」

源治も苦笑いだ。

尋ねて回るものの、概ねこんな感じのやり取りで終わる。

「最近このあたりで、怪しい奴を見ませんでしたか？」

「さあ、特には」

「今回の事件で、心当たりはありませんか」

「いや、ありませんね」

「どんな小さな事でも良いんです」

「この村には、あんな事をできる人間はいないですよ」

少々きつめにも尋ねたいのだが、どうも村人ののんびりした態度を見ていると、源治も調子が狂う。

「それにしても、田舎ってのは家と家の間が広いもんですね」

「何だ、若いくせにバテたか」

どうも聞き込みを続けていてもマシな情報は得られそうもないというのが、沢井の足を一層重くしているようだ。

「なあ、佐倉って家に行ってみるか」

「あっ、あの包帯の若様」

「ああ」

いきなり本丸かと、沢井の足取りが少し軽くなった。

「ここが全部、家なんですかね」

沢井が薄く白い息を吐き、感嘆の声を上げた。

「高い塀だな」

源治は自分の背の倍を優に超える高い壁を見上げる。

「とりあえず、聞いてみるか」

源治と沢井は門の前へと回った。

## 第5回-2

屋敷の中からは、白髪まじりの小柄な男が現れた。歳の頃は、六十を過ぎたあたりか。この村でよく見かける年代だが、着物のためかいくぶん品があるように見える。顔の皺が、柔和な表情のため余計深く目立つ。

「あんたが、佐倉さんかい」

「いえ。私はこの家の使用人をしております、八代というものです」

「そうかい。すまねえが、旦那さんか誰かを呼んでもらえねえかい」

「旦那様は、あまり人とお会いになりませんので」

「この間の事件のことで、聞きてえんだが」

「ですからそれは、私がお答えします」

八代という小男の目が射るような変わったのを、源治は見過ごさなかった。それは、拒絶の強烈な意志を感じさせた。

「申し訳ございません。旦那様は御高齢ですので、見知らぬ人と会うのは億劫になっていらっしゃるのです。私もながいことこのお屋敷におります。大抵の事は私でわかるとお思いますので」

八代は先ほどの固い拒絶を薄めるように、柔和な表情で、いつそう穏やかな口調になった。

「そうかい。一応、あの晩に出かけた人間がいなかったかと、気になる事がないかを聞いて回っているんだが」

「はいはい。あの日は昼間に使用人の女が一人、使いに出了ましたが夕刻までには帰って来ました。その他は出ていく事も、訪ねて来る人間もいませんでした」

八代は少し思い出すそぶりをしながら、スラスラと答えた。

「この辺りの地主だっていうから、もっと人の行き来があるかと思ってたんだがな」

「もう少し暖かくなれば別ですが、今の時期は特に」

「なるほど。それにしてもでかい屋敷だな。一体何人ここで暮らしてるんだい」

源治は言葉を選んだ。家族構成などを露骨に聞くと、この男は不審に思うだろう。いや今もそう思っているかもしれない。勘ぐられた時の予防線を張る意味で、源治は屋敷に関心があるようなふりをして、尋ねかけた。

「旦那様と奥様、それに長男の一之様、二男の昇様のお二人と長女の幸江様、姪の千鶴子様です。ああ、それと私を含め使用人が三人」

「ふーん、子どもは三人なのかい」

「はい」

「姪御さんも同居されているんですか」

期せずして、沢井の問いかけは功を奏した。

「はい。二男の昇様が御病気ですので、町で教師をされていた千鶴子様が自宅内で勉強を見てらっしゃいまして、その後はお世話も兼ねて」

「病気？ ああ、そうか」

「どうか、なされましたか」

八代が怪訝そうな顔をする。

「いや、この村に着いた時に顔中に包帯を巻いた人と出会ってな。駐在の田部さんがそういや、佐倉の若様と言っていたな、と思ってな」

源治は細かな嘘を散りばめる。

「昇様は生まれたばかりの頃に大病を患いまして」

「今はすっかり、よろしいんでしょう？」

「とんでもない」

沢井の言葉に、八代は慌てて頭を振った。

「対面的な事もありますので不自由はない、としておりますが、ほとんど寝たきりです」

「しかし、昨日お会いしましたよ」

「ええ。よほど気分が良い日には、外出もされます。昨日は、暖かかったですしね。けれども、ほとんどは屋敷で寝たきりです」

八代はそう言いながら、口元を押さえ、俯いた。

「申し訳ありません」

八代のあまりにも沈痛な面持ちを見たせいだろう、沢井は慌てて何度も頭を下げた。

「すまねえな。事情も知らないのに、軽口叩いちまって」

「いえ・・・」

「八代。お客様ですか」

必死で感情を抑えようとする八代に向かい、屋敷の中から声がかかった。それはこの村に似つかわしくない、透きとおるような女の声だった。

「いらっしやいませ」

細かな足音とともに現れた女は、その声から想像する以上にこの村には似つかわしくない姿をしていた。白いブラウスにピッタリとしたスカートの組合せは、このまま都会に出しても全く違和感はないだろう。

「八代、どなた？」

源治と沢井に深々とおじぎをした女は、傍らで小さく控える八代に尋ねる。

「はい。刑事さんです。先日の殺人事件のことで」

「まあ、あの事件のことで」

女は目を大きく見開き、そして瞳を伏せた。

「この村に帰ってきて七年近くになりますが、あのような痛ましい事件が起きるなんて」

女はきつく唇を噛みしめている。

「あなたは？」

「はい。千鶴子と言います」

この女がああ包帯の男、二男の昇の勉強を見てやり、世話をしているという、この家の姪だった。